



最後の子どもたち *Die
letzer Kinder von
Schewenborn* (1983)
グードルン・パウゼヴ
ァング(高田ゆみ子訳)
小学館(5/1刊・¥
780)

西独版ザ・デイ・アフター。

東ドイツの国境に近い、小さな田舎町シェーベンボルン。その町まで、休暇をすごしてきた一家の前に、突然襲いかかる核の閃光。物語は、核戦争後四年、生き残った十七歳の少年の眼から語られる。けれど、本書はホロコースト後の世界を描いたものではなく、直後数カ月を、より現実的に、より緊張感をこめて書いた作品だ。——実のところ、核戦争とその後の描写に、新しい要素は何も含まれていない。崩壊した秩序、人の温情と非情さ。放射能症や、伝染病で死んでいく住人たち。これらの多くは、主に五〇〜六〇年代に出た核戦争もののどこかで書かれたものだ。しかし、より現実的な、西ドイツ・ヨーロッパの同時代的感性として、むしろ大きな意味があるといえる。核の直撃をまぬがれた、主人公の兄弟や両親は、薬を得られぬまま、インフルエンザ、チフス、放射能症によって、次々と死んでいく。四年生きつづけた少年にとつて、明日は既に閉ざされている。そこには、未来の成り立つ余地はない。従って、SFの成り立つ余地もない。良し悪しは別にして、そういう本なのである。